シリーズ：授業と生徒を語る

# 生徒の気づきが「学び」のきっかけ

県立太田フレックス高校　　齋藤　理一郎

## 誰がためのお悩み相談？

「勉強が苦手な子、授業に意欲がない子を何とかしたい」と相談に来る先生がいる。授業のアノ手コノ手を紹介して、あとで生徒の反応を尋ねると、「それでも出来ない、やらない子がいるし、逆にカンタンすぎて、ふざける子もいる」と。お悩み相談は続く。僕が、「先生が学力をつけたい層は、どの辺ですか？」と問うと、「できない子、やらない子たち」の返答。「ねらった層の学力定着に手応えが感じられないし、他の子たちは飽きている、呆れているわけですね。生徒の声を代弁すれば、『この先生、何がしたいん？』って。戸惑いますよ。センセ、自分を慰める暇があったら、もっと生徒と向き合ってください」と突き放す。一緒に仕事をする仲間だからこそ、思ったことをはっきりと伝えて、「教室で、生徒の前に立つ怖さと覚悟」を噛みしめてもらう。

## 通常学級にも「特別支援教育」の視点を

2007 年度から小中高の通常学級でも「特別支援教育」が始まった。それまで、学習に遅れがちな子どもたちを「怠けている」「やる気がない」「勉強する意味がない」と切り捨ててきたことを考えると、近年、彼ら彼女らの学習権にも光が当たってきたことは、様々な学会に参加しても感じている。僕自身、あの頃の授業で取り組んでいた「支援」は、周囲からは「そこまで生徒にやってあげる必要があるのか？」の風当たりが強かった。それが今では、多くの先生方が「そうだよね。そういうやり方があるよね」と受け入れてくれるようになった。当時の自分を振り返ると、「学校生活で適切な支援をすることで、子どもたちが自信（自身？）を取り戻し、社会に堂々と出て行けるように育てる。そして、彼ら彼女らを受け入れてくれる社会を築けるように、実践成果を発信していく」ことに心血を注いでいた。

## 嫌われるのを恐れて、教員やってられっか！

あれから 10 年以上。支援を必要とする子どもたちを受け入れる社会になったかというと、そこまでの力は僕にはないと分かった。気になるのは、小中学校で支援を受けてきた生徒が、「オレ／アタシは、支援を受けるのが当たり前だ」の姿勢で高校に入学してくることだ。社会のベクトルと、その構成員のエネルギー量の乖離が悩ましい。「学校生活で守られている間はいいけど、キミらがこれから生きる社会は、そんなに心が広くない」ということを理解・納得した生徒を、卒業させたい。そんな思いで今は、「僕はキミらへの支援の方法は知っているけど、支援を必要とするんだったら、自分から、何に困っているかの弱さをさらけ出してごらん」のスタンスで生徒に接している。おかげで、一部の生徒からは「ニコニコ優しく信頼できる先生」と親しまれ、一部の生徒からは「あのニヤニヤ顔を見るだけで吐き気がする」と憎まれ、教員として正当な評価をいただいている。

## 高校で英語を教えています

外の人に自己紹介すると、「あー、苦手だったなぁ」と振り返られるアレである。そういう時は、「ありがとうございます。苦手なみなさんのおかげで、僕の生業は支えられているんです」と頭を下げる。今、教えている生徒たちも「英語できなーい。読めなーい。書けなーい。しゃべれなーい」と、教室で「自分が、如何にできないか」を主張する。そんなこたぁ、分かってる。問題は、「苦手だから、やらなくても許される」という歪んだロジックを、「苦手でも、やらなきゃならない時がある」「苦手だからこそ、やってみせる」に転換させること。それが教員の仕事だと思っている。

## 文字から音から、気づきをうながす

毎年、最初の授業は、アルファベット文字から始める。Ball & stick 字体を生徒に見せて、「直線

だけでできている文字／曲線だけでできている文字／直線と曲線でできている文字に分けよう！」と。カタチを見れば取り組める活動に、「なんだ、この授業は？」とザワつきながら文字を分類する生徒たち。ノートに書く文字を覗き込むと、生徒一人ひとりの視認知や協調運動の課題が見えてくる。「カンタンすぎ！」という生徒たちに、「じゃあ、自分のやり方で、アルファベットを分類してごらんよ」と、クラスの前で発表させる。

文字のカタチを意識して書けるようになったら、次は「文字と音の関係」に気づかせる活動に入る。3〜5 文字つづりの、”Magic-e”の単語をカードで見せて、音読練習をして、「読みのルールは分かった？」と問いかける。気づくまで、音読をくり返す。やがて、「分かった！」と声を上げるのは、たいてい最初に、「単語読めなーい」と自己主張していた生徒だ。「すごいねー」「エへへ〜」と、おそらく中学での英語の授業では見せたことのない表情を浮かべる。

**そして、ちょっと背伸びした「学び」に挑む**

文字は、見れば写せるようになった。つづりは、読もうという気になった。生徒の「できなーい」の嘆きを、一つひとつ「できた！」の経験に変えていくと、教室の雰囲気が変わる。この辺りで、生徒の苦手意識が強い一つの、「つづりを覚える」活動に挑戦する。提示する単語は 10 個程度。教科書に載っているものでいい。しばらくの単語学習ののち、「10 分後につづりテストをします。合格点は 70%・・・と言ったら、キミらは、どう取り組む？」と投げかける。実は生徒がテストに合格することなんかどうでもよくて、ここでは生徒自身が「自分に適した学習方法を考えて、実行する」ことが狙いになる。これまでの授業で、個々の生徒の「認知特性」は見立ててあるので、学習タイムに教室内を回って、「任せとけ。キミができるようになる方法を、僕は知っている」と、それぞれの生徒に適した「学習方法」をアドバイスする。中には、覚える課題を諦めて、授業の邪魔を試みたり、机に突っ伏して抵抗したりする生徒もいる。彼ら彼女らにも、近づいていって個別に声をかける。「出来ない自分が恥ずかしいから、照れ隠ししてるんだろ？出来ないまんまの方が、よっぽど恥ずかしいよね」とか。「静かにしなさい」「ちゃんとやりなさい」「やればできるよ。頑張ろう」とただ叱咤激励するより、「テメェ、この野郎！」と思わせた方が、生徒はコチラの仕込みに乗せやすい。そして、乗せたからには、必ず生徒に、「やったらできたの達成感」を味わわせる覚悟で、支援の引き出しを数多く用意しておく。年間の授業で、事あるごとにクラスに投げかけるセリフがある。「僕は、キミらに勉強できるようになってもらいたいと思って、ここに立っているんだ。だからキミらは、勉強できるようになりたいと思って、こっちに目を向けてくれ」

英語の教室での、生徒と僕とのスタンスが定まった。「なんだかんだ言って、コイツは最後に救ってくれそうだ」という安心感をもった生徒は、英語を読むことでも書くことでも話すことでもインタラクションでも、ちょっと背伸びを求められるような「学び」を楽しんでくれるようになる。

**プロジェクト学習「太フレ生の英語力」の風景**

生徒は「自分の好きなモノ」について Show & Tell の発表に取り組み、その英作文を 12 月の学習発表会で展示してくれました。この 8 ヵ月前には、アルファベットもおぼつかず、「単語が読めない、書けない」と嘆いていた生徒たちによる力作です。仲間の英文を読んでいる生徒たちの後ろ姿からも、真剣に見入っている様子が伝わってきます。